

第1回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020年1月15日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

10:00から12:00までの予定で、文部科学省旧庁舎6階第二講堂で行われた。

一般傍聴者は人数制限があったこともあり、200名程度であった。

テレビカメラ5台を始めとして沢山の取材陣がテーブルを取り囲み、会議の様子が傍聴席からは見えにくい状況で、関心の高さが伺える。

今回の議題は以下の通りである。

1. 検討会議の議事運営等について
2. これまでの経緯・今後の検討スケジュールについて
3. 自由討論
4. その他

まずは、萩生田文科大臣から挨拶があった。主な内容は以下の通りである。

英語民間試験活用は延期となったが、4技能の適切な評価は重要であるので、令和6年度からの実施に向けてできるだけ公平でアクセスしやすい仕組みはどのようなものか検討していただきたい。記述式についても導入の見送りを決定したが、これまで指摘された課題や見送りになった経緯の検証し、それを踏まえた今後のあり方を検討していただきたい。この会議は、高大接続改革の観点も念頭に、なるべく多くの関係者からの声を反映するためヒアリングを行いながら、約1年程度で取りまとめをしたい。

次に、事務局より委員の紹介があった。

三島座長から時計回りに川嶋委員、益戸委員、荒瀬委員、齋木委員、島田委員、清水委員、末富委員、両角委員、岡委員、小林委員、芝井委員の代理として同志社大学の圓月委員、柴田委員、萩原委員、吉田委員、牧田委員、オブザーバーの山本氏が座っていた。

芝井委員の他、穴戸委員、渡部委員も欠席であった。

文科省側の出席者として大臣以外に藤原事務次官、柳官房長、伯井高等局長、玉上大臣官房審議官が紹介された。

次に、三島座長の挨拶があった。

英語4技能を育成することも思考力・表現力を評価することも共通テストにおいてはかるべきかどうかは別として非常に重要であるから、これまでの経緯を検証しながら、幅広いご意見を伺いつつ進めていきたい。公平性・公正性が重要だと指摘されており、受験生や国民が不安などを感じる制度にならないよう広く受け入れられる提言をまとめたいと述べた。

議題 1 の会議の運営について、事務局より資料 1~3 を示し、会議が原則公開で行われることなどの説明があった。

また、三島座長からは、座長不在時の座長代理として川嶋委員、益戸委員の 2 名が指名され、了承された。

10:15 頃から、議題 2 のこれまでの経緯について、事務局より資料 4~6 の説明があった。

10:50 頃から、自由討論として各委員が意見を述べた。主な発言の内容は以下の通りである。(発言順)

- 末富委員（日本大学文理学部教授）：提出資料あり【反対派】
教育における貧困格差の改善を中心に研究をしている。内閣府の子供の貧困対策に関わり、高等教育の無償化など進めてきた。経済的格差改善の視点から教育機会均等の保障を求める。オンラインなどを活用して、中高生や保護者など多様なニーズを持つ当事者の意見集約が必要である。
- 萩生田大臣：
一度くらいは会議をクローズにして、悪かった部分を指摘するような会があってもよいのではないかと文科省側も変な数字のマジックはやめて、数字を正しく示して議論の準備をしてもらいたい。11:10 頃に退出。
- 両角委員（東京大学大学院教育学研究科准教授）：提出資料あり【反対派】
高等教育を研究している立場から参加する。以前からされてきた指摘がなぜ反映されなかったのかこれまでの経緯を徹底的に検証すべき。「手段」と「目的」を取り違えたことが問題であり、入試によって教育を改革しようという発想がおかしい。多様な現場の声や専門家の声を取り入れるべきである。
- 吉田委員（学校法人富士見丘学園理事長・富士見丘中学高等学校校長、日本私立中学高等学校連合会会長）：【推進派】
入試は大学が決めることである。世界からの教育の遅れを取り戻すために提言がなされ、4 技能や記述式が必要とされてきた。格差の問題は内閣府がお金をつけてやればすむことだ。今まで何年間も議論してきたことを本当にゼロにするのか？変える方向で進んできたものをきっちりとすすめてもらいたい。
- 三島座長（東京工業大学名誉教授・前学長）：
全部元に戻すのではなく、これまでの経緯をしっかりと検証したうえで安心できるようなシステムを考えていく。
- 牧田委員（一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会会長）：【反対派】
大学選択は自由であり、自由と平等は成り立たない。公平と平等の概念を持ち込むと試験をしないで入るという究極の結論になる。英語の 4 技能と記述式は二次試験でク

リアすべき。

- 柴田委員（公立大学法人福岡県立大学理事長・学長、一般社団法人公立大学協会氏名理事）：【反対派?】
どういう体制にするのか早急に明確にしてほしい。英語成績提供システムはありがたい制度だったが、前提がなくなれば無理だ。記述式採点のために一週間遅れることになった入試の成績提供時期を元に戻してほしい。
- 益戸委員（UiPath 株式会社特別顧問、株式会社肥後銀行社外取締役）：【推進派】
これまで外資系企業に勤めており、大学分科会では委員として教学マネジメントなどに取り組んでいる。外資系では専門分野は聞かれても、大学名を聞かれたことはない。日本企業はこのままでいいのかというのが原点だと思うので、教育改革を一連の流れで点検していくべきである。大学入試センターの山本氏にも発言していただきたい。
- 岡委員（山口大学学長、一般社団法人国立大学協会入試委員会委員長）：【反対派?】
これまで議論に膨大な時間をかけてきた。英語の 4 技能評価は確かに重要だが、スピーキングテストを何千人に等しくやるのは困難である。できるものとできないものを明確にしたい。記述式については個別試験で課してきたが、高等教育が変わるならと容認していた。
- 圓月氏（同志社大学副学長） 芝井委員の代理として：【不明?】
私立大学は大学生の 70%が学んでおり、多様な学生を引き受けてきた。経済格差・地域格差に関して公正性を担保する案を示してほしい。私立大学の足並みが揃わないと言われるが、一般入試は多様性があり、一律にするのは難しい。
- 川嶋委員（大阪大学高等教育・入試研究開発センター長（特任教授（常勤）））：【反対派】
大学全入時代がやってくるという前提において、入試によって教育を改革しようとするのは困難。高等学校は多様であり、個別入試やセンター試験においてもすでに格差が生じている。受験機会を完全に平等にすることはできない。大学が受験生の背景を考慮したうえで総合的に評価すべき。
- 清水委員（筑波大学大学院教育研究科長・教授）：【不明?】
数学教育が専門。マーク式というが、センター試験でも数学では多肢選択ではなく数値を選ぶような形で解答するものもある。センター試験と個別試験の守備範囲など、議論の焦点を切り分けながら、何を前提として考えるかをまず交通整理してほしい。
- 萩原委員（東京都立西高等学校長、全国高等学校長協会会長）：【反対派】
決まっていないことが多すぎて、不安である。1 年間で次の方向性を決めてほしい。高等教育局だけではなく初中局や英語教育関係の方に入ってもらうことも必要。4 技能評価は重要であるが、やり方が問題。
- 島田委員（筑波大学人文社会系教授）：【反対派?】
国語教育が専門。大学入試全体の中で記述式問題の果たす役割は重要であるが、課題

の解決に向けた取り組みがあったものの、解決できない点があったという結果を重く受け止めるべき。大学入試で高校教育を変えようとするのは本末転倒。

- 齋木委員（公益財団法人日本ラグビーフットボール協会理事、前外務省研修所長（元同国際法局長・経済局長））：【推進派?】
これまでの外務省での知見を活かしたい。個人が一生を通じて学び続けることができる能力を身に付けさせることが教育の意義である。高校教育と大学教育をつなぐものとして入試の役割は一定程度求められていて、教育を後押しする機能をも有している。
- 小林委員（学校法人北里研究所理事長、日本私立大学協会常務理事）：【不明?】
公平性や経済格差の解消が一番大事。理想と現実にギャップがあり、うまく制度設計におとしこめなかったことが原因。あらかじめ会議のスケジュールが決まっていることで、議論が時間切れになってしまうことを危惧している。意見の集約にインターネットの活用などがあってもよい。
- 山本氏（独立行政法人大学入試センター理事長）：益戸委員からの求めを受けて
これまでセンター試験の安定的な実施と良質な問題提供、採点のノウハウを蓄積してきた。いろいろな専門家の知見を考慮して問題を作成している。個別試験との役割分担が必要である。高校の授業改善に対するメッセージが送れる良問を作成していきたい。既に試行調査のような形のプロトタイプが出来上がっており、記述式見送りに伴う新たな出題方法・作成方針などについては、今週末のセンター試験および来週末の追試験が終了してから今月中に発表したい。
- 荒瀬委員（大谷大学文学部教授）：
これまでの会議の中心的メンバーであったが、今回は発言なし。

次回は、これまでの経緯の検証を主な議題とする予定で、第2回会議は2月7日(金)15:00～17:00に開催される予定である。